

私のワークライフバランス

駆け出しパパ期のライフとワーク

中京大学心理学部 任期制講師

土元哲平

研究者として歩み始める中、父親になった土元哲平先生。育児をする中で父親・研究者として自分の代わりはないことを痛感。研究と生活の維持は挑戦的なものであることを語っていただきました。

2021年12月、新型コロナウイルス感染拡大の第3波の最中に娘が生まれました。この時期は、感染症に対する制限が厳しい時期だったのですが、幸いにして、娘が生まれた病院では、出産時のみ立ち会うことができました。それから生後しばらくは、産前には想像もなかった子育ての現実には圧倒されました。“泣く”、“吐く”、“こぼす”はかわいいもので、娘が急に咳き込んだりすると、同時に「次は私か、妻か……」と恐怖が襲います。さらに、私と妻の両親の実家が遠方にあったこともあいまって、ますます、“休まらない、終わりのない育児”であるかのように感じました。子育ては決してつらいだけの時間ではなく、楽しい、癒やしの時間でもありますが、投げ出したくなる瞬間も少なからずありました。一方で、親としての役割から逃げ出すことは、自分をも

裏切ることだ、という思いもあり、その緊張感の中で育児に関わっていました（考えすぎでしょうか?）。

私が父親になったのは、博士学位を取得後、ポスドク研究員として雇用されている時期でした。仕事との関係で育児についてふり返ると、裁量性が高いこの時期に娘が誕生したことは、育児に関わりやすくさせた一つの要素だったと感じます。例えば、朝の3時から6時頃まで論文執筆（兼・途中で娘が泣いたら育児）をするぐらいの自由度がありました。一方で、産休や育児取得については、難しさを感じていました。私一人の給料で家計をやりくりしていましたが、産休を取る（＝収入が激減する）ことは、出費がかさむ産前産後においては特に致命的だったのです。また、任期付きのポストでは、成果を上げなければ生活も危う



くなります。育児に携わる中で、研究職は、究極的には“自分の代わりがない仕事だ”ということを感じました。

あれから約2年4か月が過ぎ（執筆現在）、娘は一人でできることが増えてきました。現在では、常勤として大学に勤めており、比較的ライフとワークの“バランス”が取れているように感じます。しかし、まだ私は任期付き教員ですし、第2子出産という将来のことを想像すると、この状況は利他的なものだろうと思います。そもそもキャリアにおいて“安定”はあり得ないとはいえ、研究を進めながら生活を維持していくことは常に挑戦的なものだろうと感じています。

私のキャリア年表

	ライフ	ワーク
22歳（2015）	実家暮らしから一人暮らしへ。	大学卒業（専門：宇宙物理学）。修士課程に入学し、教育学を学ぶ。
24歳（2017）	鹿児島から京都へ。	博士課程に入学し、文化心理学を学ぶ。
27歳（2020）	京都から大阪へ。結婚。	博士号取得。立命館大学にPDとして着任。
28歳（2021）	妻は産休取得。第1子誕生（12月）。	離島でのフィールドワークを開始。娘の誕生前に何とか帰着。
29歳（2022）	妻は仕事に復帰。0歳で保育園入園（1歳以降の途中入園が困難なため）。	大阪大学に日本学術振興会・特別研究員PDとして着任。申し訳ない気持ちで海外学会やフィールドワークに出かける（現在に至る）。
30歳（2023）	大阪から名古屋へ（9月）。年度途中での保育園入園は難しく、妻は専業主婦に。	中京大学心理学部に任期制講師として9月から着任（現在に至る）。



つちもと・てっぺい

2020年9月、立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士・文学）。専門は文化心理学。日本学術振興会特別研究員PD（大阪大学文学研究科）を経て現職。著書に『転職におけるキャリア支援のオートエスノグラフィ』（単著、ナカニシヤ出版）など。